

子供の頃は、テレビから聞こえてくる言葉は、日常の話言葉とは違う特別の言葉だと思っていました。本を音読したり、演劇のせりふを言ったりする時なども、日常語とは違う特別の言葉を使うのだと思っていました。高校2年生の時、初めて東京に旅行しましたが、街で人々がテレビの中と同じようにしゃべっているのを聞いて新鮮な感動を覚えました（さすがにその頃には、自分たちの言葉の方が違っているのだとわかっていました）。

私は鹿児島県の出身です。父も母も純粋な鹿児島人ですから、高校卒業まで自宅では鹿児島弁の世界で過ごしました。標準語を自由に使いこなすためには、頭で考えるときにも標準語を使って考えています。帰省したときには当然鹿児島弁でしゃべりますから、頭の中も鹿児島弁で考えることとなります。学生時代は鉄道を使って帰省してましたので、熊本を過ぎるあたりから、「そろそろかごつまべんにせんなあね」という具合に頭の中を切り替えていました。最近では飛行機で帰るのですが、なかなか頭の中を切り替えるのは難しいです。実家に着いてから1時間ぐらいはなんだか変な気分です。

「バイリンガルといわれる人たちもきっとそうなんだろうなあ」と勝手に納得している次第です。方言の場合には文字が同じですから二カ国語を使い分けることとは質が違うのかも知れませんが、ヨーロッパ系の言語はみんな同じ文字を使っていますし、もしかしたら標準語と鹿児島弁との違いはスペイン語とポルトガル語との違いよりも大きいかも知れません。鹿児島でも島嶼部の言葉はさらに違っていて、奄美大島出身の女性と結婚した高校時代の友人は、家庭での会話には標準語を使っています。日本人とフランス人が英語で会話をするようなものですね。

なんだかまとまりのない文章になってしまいましたが、いろいろな国の言葉を知ることはおもしろいと思います。外国に行ったとき、その国の言葉を多少なりとも知っているのとそうでないのでは、得られる感動に雲泥の差があるのではないのでしょうか。現在私はフランスで旅行を楽しむために（特にフランスの田舎を旅行したいので）、フランス語と日々格闘しているところです。

英語はたいへんだ

小川 昭二郎

私が始めて外国語の本に興味を持ったのは、中学生の時でした。同じクラスにM君という仲良しの友達にいたのですが、家にもよく遊びに行きました。彼のお父さんは外国航路の商船の船長で、家には珍しいものが沢山あったのです。私が特に気に入ったのは、“Popular Science”という子供向けの科学雑誌で、遊びに行ったときは必ず借りて帰りました。多分、M君のお父さんは、息子に科学に興味を持ってもらいたくて外国から取り寄せていたのだと思います。しかし、彼はほとんどこの雑誌に興味を示しませんでした。その代わりに、赤の他人の私がこの本の影響を受けて科学の道に進むようになったのです。

宇宙、自然、機械などの写真や絵が載っていたのは覚えているのですが、書かれていた英語についてはあまり記憶がありません。つまり、この本を通して英語の勉強をしようなどとは全く考えず、ただ自然や科学技術の面白さを感じていたのだと思います。

高校生になってから、ますます理科が好きになっていったのですが、同時にまた、当時の貧しい日本を救うには科学技術しかないと感じていたようです。したがって、語学などというものは、生産には本来関係の無いもので一生懸命やるものではないなどという生意気な考えをしていたようです。

当然、英語の勉強に身が入らず、大学受験にも失敗してしまいました。浪人中は心を入れ替えて、苦手な英語の勉強に時間をかけることにしました。ただ単語を暗記していても面白くないので、好きな推理小説を英語で読むことに専念しました。この訓練は、現在、化学の専門書や文献を読むことに大いに役立っていると思います。つまり、なるべく辞書を使わずに1行ごとに、なるほど、なるほどと思いながら読んでいく楽しみは当時の勉強で身についたものだと思います。

私はもともと無口な少年で、人と話をするのが苦手で、まして、英語で話をするなどとは考えただけでも恐ろしかった。当然、会話の訓練は出来るだけ避けてきました。しかし、研究を仕事とするようになってから、外国に行って国際学会で発表しなければならなくなってしまった。そこから私の地獄が始まったのです。

そのつらい話をここでする積りはありませんが、好きな科学の研究だけしていればよいというわけでは決まてないということは、子供のころは考えもしなかった。君たちも、これからは、どのような職業につくことになっても、国際語である英語の読解力と会話力は必ず必要になります。中学生の時からしっかり勉強しなければなりません。大学生になってからでは遅いのです。

しかし、それ以前に、自分の考えを的確に相手に伝える訓練が必要です。外国では、ディベートの訓練を子供のうちからやっていると聞いています。人と言い争いをすることはいやなものです。しかし、信念をもって自分の考えを相手に伝え、また、相手の言うことをしっかりと聞くことがディベートなのです。とくに、相手の言うことを聞いて理解するということが大事です。

わたしは、大学で授業をしています。学生から質問がないときはさびしいものです。全員が私の講義をすべて理解しているはずがないのです。それなのになぜ質問をしないのでしょうか。また、ゼミナール形式で学生に発表させ、それについて討論する授業があるのですが、そこでも、あまり質問や自分の考えをのべることをしない学生が多い。彼女たちは恐らく世の中に出てから苦労すると思います。私は時々中学校の授業を廊下から覗くことがあるのですが、活発に意見を言っている様子を目にして頼もしく思っています。また、自主研究などでは、自分たちで意見を出し合って進めていくということも聞いています。中学校時代から自分の意見を頭の中で組み立て、また、相手の話をしっかりと理解しようとする訓練がされていれば、外国語の会話もそれほどむずかしいものではないと思います。

私は大学の外でいくつかの委員会の委員長をしています。なるべく口数の少ない委員から意見を言ってもらおうように心がけています。討論が活発になれば委員会も楽しいものです。

外国語について書くようにということでしたが、話がそれてしまいました。英語を母国語としない日本人は国際的に不利だなどと言っている時代がもう来ています。帰国子女学級の子供たちと仲良くすることでもよいから、外国語を恐れない、むしろ楽しむようになってもらいたい。

しまった。大学生のために書く積りが中学生向けのお話を書いてしまった。もう後の祭り。ごめんなさい。

留学でわかる英語の力

藤原 葉子

オーストラリアの南端メルボルンで、娘と夫とともに2年間の留学生生活を過ごした。モナッシュ大学の附属病院に併設されたベーカー医学研究所は、心血管系疾患の基礎研究では有名なところで、博士を取得して娘を出産した後の

研究復帰と子育てがこの場所から始まった。

保育園に8ヶ月の娘を初めて預け、初めて研究所に行った日はPhDの学生のFelicity嬢の誕生日。彼女は若くて元気でおしゃべりで魅力的な女性だった。ランチをみんなで食べに行くことになり、女の子たちがにぎやかにボーイフレンドのうわさ話を花を咲かせるのを聞きながら、「日本に帰るころには、Felicity達のおしゃべりに加わってぺらぺらとおしゃべれるようになっていない」という甘い期待を抱いていた。そして2年後、にぎやかなポストクの女の子達との早口で気の利いた会話という目標はやはり実現できなかった。その理由について反省を込めて検証してみたい。

まず、英語上達のために留学するのであれば、日本人のいない仕事の暇なラボに行くべきである。私が一人ぼっこのさびしい緊張した日々を送ったのは、Felicityの誕生日からわずか3週間であった。同じラボには日本から研究者が次々に入ってきたし、落ち着いて周りを見渡すと、研究所内には日本人が7人もいた。ペーカーは外国からのポストクが大勢集まってくるのだが、15人中7人が日本人というのはかなりな割合である。日本人の研究者は優秀で、どうしても有名な研究室に集まってしまうので、アメリカのノーベル賞受賞ラボでもきつと似たようなものであろう。Felicityは同じラボでもプロジェクトが異なり実験する部屋が違って、私と一緒にいたのは、無口なおージーのリサーチアシスタントの青年、自信家のロシア人と彼に気のある意地悪なりサーチアシスタント。この環境下で黙々と実験をしていたので、結局英語をしゃべったのは朝夕娘を預ける保育園のみということも多かったのである。

また、英語上達のために留学するのであれば、家族連れでなく単身で乗り込むべきである。家へ帰ると夫とはどうしても日本語で話すことになる。娘が小さいと、ラボの後で大学の英語コースに入って勉強をすることもできない。私とは対照的に日本人がまったくいないメルボルン大学のラボに入った夫は、悔しいけれども私よりはずっと上手にしゃべれるようになった。

しかし保育園のおかげで他の日本人が知らない英語をたくさん覚えることはできた。かなり上手になった人でも聞き取るのが難しい幼児英語もちゃんと聞き取れたし、あまり役には立たないのだが、マザーグースや童謡は100曲近く覚えた。娘が英語を少しずつしゃべれるようになると、発音も2歳の娘に直されるので私達の英語力も若干上達した。もう少し長く滞在していたら、格段に上達しただろうと非常に残念である。

そして一番の原因は私のshyで怠惰な性格にあったのだと思う。いざしゃべろうとするとどう表現してよいかわからないし自信がない。オーストラリアは多民族国家で、英語をしゃべることのできない人が世界各国から移民として暮らしているので、実は英語がわからない人がいるということがめずらしくない国なのである。こちらはヒアリングが比較的良くわかるようになると、同じテンポでしゃべることができないのがもどかしく、つい単語を並べていると、むこうは頭を働かせて推察してくれる。それでのおおよその意思疎通ができてしまっていた。

ところが隣のラボにいた日本人の友人はそうではなかった。彼はどんなに時間がかかっても、じっくり英語の構文を組み立て、たとえば三人称のsのつけ忘れなど何度も言い直し、正しい文法でゆっくりと話をしていた。おージー達はそれをいらいらして聞くのではなく、口をそろえて「彼は非常に誠実ですばらしい人である」と言うのである。もちろん彼のキャラクターもあるのだろうが、それから気がついたことは、移民でないおージーが、みんなきちんとした英語を使っているわけではないということである。3人

称のsや過去形、現在完了形、時制の一致など大学まで英語教育を受けてきた私たちにはまず間違えることのない文法を、きちんと使えない人もかなりいるのである。

帰国後おージーたちとメールでやり取りをするようになって、「とてもよい英語だ。YOKOはメルボルンに来たときにはぜんぜん英語ができなかったのに、こんなに上達するなんてびっくりした」と書かれてこちらもびっくりした。そんなにひどかったかとショックも受けたが、できなかったのではなく、使っていなかっただけなのである。その場にいれば自然とおしゃべれるようになるのではなく、使う努力をしていなければ、きちんとした英語をしゃべれるようにはならないのである。

今年の1年生のTOEICの点数はリスニングのほうが良かったそうだし、最近では英語教育も文法よりヒアリングやスピーキングに重点を置くようになってきている。しかし、会話は所詮コミュニケーションである。英語で育ち、英語しかしゃべらなかつた娘は日本に帰るとあつという間に英語を忘れてしまった。所詮そんなものである。

オーストラリアでも、大学で高等教育を受けている人はきちんとした英文を書くことができるし、エッセイなど記述力を徹底して教育されている。それが高等教育であり教養であると思う。日本人は長い文章を書けるかどうかは別にしても、文法的にかなりきちんとした英語を書ける、そしてしゃべることができるということが、外国人にはとても高く評価されている。これはすごいことだと思う。それなのに、何年も英語を勉強してきたのにちっともしゃべれず役に立たない英語教育なんて、という理由でヒアリングやスピーキングに重点を置くようになってしまったのは、非常に残念なことだと思う。

だから皆さんには、きちんとした文法の基礎の上にしつかりとした文章を記述できるような英語力をつけてほしいと思う。それさえしつかりしていれば、聴く、しゃべるなどということはどうにでもなるからだ。

英語をしゃべる環境に漫然と身をおくだけでは、その中で暮らしていくのに困らないだけの会話しか身につけることはできないし、そのような英語は2歳の子供でもすぐにできることである。国際人として恥ずかしくない教養と品格のある語学力をぜひ大学で身につけてほしい。

ちなみにFelicityはおしゃべりのせいばかりではないが、博士課程を修了することができず、私の帰国前にラボを去ってしまった。私のささやかな目標が達成できなかったもうひとつの理由である。

外国語と私

太田 裕治

<その一： 第二外国語>

大学の教養課程では第二外国語にフランス語を選択した。理由はいまでもよく覚えていない。

入学後のクラス分けでは学年全体で全15組くらいであったと思うが、そのほとんどがドイツ語を選択するという状況であり、フランス語は帰国子女クラスを入れても2、3クラス程度ではなかったかと覚えている。

勉強したことは殆ど忘れてしまったし、本も残っているのはオレンジ色の辞書くらいである。覚えているのは、動詞の活用が面倒なこと、LL教室ではrの発音が鴨みたいになりガーガーすること、マノン・レスコーという18世紀の大恋愛小説を読んだこと位であろうか。

それでも、英語だけでなく他の言語にも触れたことで物事の見方幅が広がることは良かったと思う。第二外国語を必修としない大学も増えつつあり、何に役立つの？などと言わずに頑張って勉強して頂きたいと思う。